

新聞記事にみる天皇家の婚儀—新たなプリンセス像の創出

青木 淳子 (大東文化大学外国語学部)

The Wedding of Emperor Family in Newspaper Articles: Creation of New Princess Image

Junko AOKI

1. はじめに：目的と先行研究

2017年9月3日、秋篠宮家の眞子内親王の婚約発表が行われた。皇室、皇族関係の婚儀のニュースは、人々の耳目を集めるテーマである。この婚約を機に、又、今上天皇の皇太子時代の美智子妃との婚儀や、皇太子徳仁親王の雅子妃との婚儀も、ロイヤルウェディングとして注目されている。

この二つの婚儀に関連して、成婚当時から近年にかけて、いくつかの写真を中心とした書籍が発行されている。例えば『美智子さま 品のある装い 58年の軌跡』では「史上初めて“一般家庭”から皇室へ 新時代のプリンセス誕生」¹と題され、その「装い」が採り上げられている。そこでは婚儀の写真の下に「皇室に吹いた“新しい風”」というタイトルがつけられている。また、『別冊週刊女性 雅子さまと愛子さま』では「新時代 雅子さま ご公務とプライベート プリンセスの微笑み」と題したページで「元・外交官らしい国際感覚や気品も、海外の人たちを魅了した」と結婚後の活動が紹介されている²。これらの記事に共通しているのは「新時代」という言葉が使われていることである。

しかし、具体的には、35年を隔てた昭和時代の美智子妃と、平成時代の雅子妃はそれぞれ、どのような意味で新しかったのであろうか？本論文では当時の新聞記事から、その「新しさ」の意味を探っていく。新聞記事というメディアを通じて、その時代の一般の人々に伝えられた情報を整理し、そこからどのようなプリンセス像が提示されたのかを実証する。そして、新たなプリンセス像の創出の意味を考察することを目的とする。

皇太子の婚儀についての、雑誌や写真集の体裁をとった書籍は多々発行されてはいるが、皇太子の婚儀における皇太子妃像についての学術的な論考は、数件である。

松下圭一は「大衆天皇制論」で「宮内庁記者会がだしたアンケートにたいして、皇太子妃は「家庭」をつくることが私の課題だ、と答えたが、皇太子妃の言葉の意味をこえて、この「家庭」こそが、大衆天皇制のシンボル価値である、と述べている³。そして松下は、皇太子と美智子妃の「今度の結婚」が「新中間層を中心に新しく若い世代に対応するのに一応成功した」⁴と評価した。

メディアを通じて大衆に喧伝された情報が、ミッチー・ブームをよんだわけだが、吉見俊哉は『カルチュラル・ターン文化の政治学へ』で、皇太子成婚とメディアとの関係を、1953年のエリザベス女王戴冠式のメディア・イベント化の延長線上にあったとしている⁵。そして「メディアのなかのさまざまな皇室の表象を、それ自体で閉じたイデオロギーとして扱うのではなく、重層的なコンテクストのなかで複数の意味をもち、それらがせめぎあう過程に着目⁶」し、メディア天皇制という視点で、皇太子の婚儀と一連のミッチー・ブームを検討している。

青木淳子は「昭和時代の結婚」で皇太子明仁親王と皇太子妃美智子の結婚を、皇室と民間のかけ橋となった輿入れであり、それは多くの人々にとって皇室を身近な存在としてとらえることを可能にした契機であった⁷と述べている。

森暢平は「ミッチー・ブームその後」でミッチー・ブーム、および「その後」を、人々がどう見ていたのか、「言い換えると、あふれるほどの美智子妃報道のなかで、人々がどう熱狂し、どう冷静になっていったのか」⁸を検証している。森は「御成婚」は、皇室の民主化が実感できるイベントであったが、1950年代後半の皇室は、外国交際の再開、宮殿再建の模索、憲法調査会での皇室のあり方検討など、民主化とは逆、つまり再権威化の流れの中にもあった⁹と述べている。森は報道の背景となる事象と記事を照らし合わせて、ブームの意味を検証している。

以上のように、美智子妃の婚儀については、大衆天皇制の一つの形として、メディア論の側面から、さらにミッチー・ブームという社会的現象から学術的にある程度、検証されてはいる。しかし本論では新聞記事に着目し、検証することで、抽象的なブームとしてではなく、具体的な状況を明らかにする。さらに美智子妃のみではなく、雅子妃の事例も採り上げ、昭和時代の皇太子の婚儀と、平成時代の皇太子の婚儀を比較検証することで、それぞれの時代におけるプリンセス像をあきらかにし、そこから皇室の在り方も探っていく。

2. 資料

本稿では、読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」と、朝日新聞のデータベースである「聞蔵Ⅱビジュアル」から基本資料を採取した¹⁰。時期は、美智子妃、雅子妃について、それぞれ婚約発表の年の1月1日から婚儀の一年後の月末までとした。

表1 皇太子妃結婚の日とデータベース検索対象日

| | 美智子妃 | 雅子妃 |
|-------|------------|------------|
| 結婚の日 | 1959年4月10日 | 1993年6月9日 |
| 検索開始日 | 1958年1月1日 | 1993年1月1日 |
| 検索終了日 | 1960年4月30日 | 1994年6月30日 |

キーワードについては、それぞれ、まず「美智子妃」で検索し、さらに「美智子 AND 結婚」と入力した。雅子妃についても同様である。

表2 キーワードによる検索数

| キーワード | 美智子妃 | | | 雅子妃 | | |
|-------|-------|--------|-------|------|-------|-------|
| | 美智子妃 | 美智子&結婚 | [計] | 雅子妃 | 雅子&結婚 | [計] |
| 読売 | 290 | 148 | [438] | 18 | 345 | [363] |
| 朝日 | 18 | 172 | [190] | 11 | 335 | [346] |
| [計] | [309] | [320] | [628] | [29] | [680] | [709] |

ヨミダス歴史館、聞蔵Ⅱビジュアルにおいて、「美智子妃」「美智子&結婚」、「雅子妃」「雅子結婚」の検索数は、表2のようになった。

しかし、これらの記事は重複したものや、偶然に言葉が重なり、内容に関係のないもの等¹¹が含まれている。ヨミダス歴史館の「美智子妃」と「美智子&結婚」のキーワード検索においては46件の記事が重複していた。聞蔵Ⅱビジュアルでは、1件、重複していた。重複分は「美智子」から省くこととする。

ヨミダス歴史館の「雅子妃」と「雅子&結婚」については、重複が8件あった。また「雅子妃」に無関係の新聞記事が1件あった。「雅子&結婚」には無関係のものが22件あった。聞蔵Ⅱビジュアルでは、「雅子妃」と「雅子&結婚」の重複が5件あったので、「雅子妃」の項目から記事数を除いた。「雅子&結婚」においては無関係のものが15件であった。

これらを省いた件数が、表3である。

表3 読売新聞、朝日新聞における美智子妃、雅子妃関連新聞記事（婚儀前後約一年）

| キーワード | 美智子妃 | | | 雅子妃 | | |
|-------|-------|---------|-------|------|--------|-------|
| | 美智子妃 | 美智子妃&結婚 | [計] | 雅子妃 | 雅子妃&結婚 | [計] |
| 読売 | 244 | 148 | [392] | 9 | 323 | [332] |
| 朝日 | 17 | 172 | [189] | 6 | 320 | [326] |
| [計] | [261] | [320] | [581] | [15] | [643] | [658] |

つまり、婚儀前後約一年間の、美智子妃関連の記事は、読売新聞が392件、朝日新聞が189件、総数581件であった。雅子妃関連の記事は読売新聞が332件、朝日新聞が326件、総数658件であった。本論文では、これを数的な分析対象とする¹²。

3. 数量的分析

美智子妃の婚儀は1959年4月10日、雅子妃の婚儀は1993年6月9日である。本調査では、検索対象を、まず便宜上、婚儀の年の1月1日から婚儀の一年後の月末とした。この検索での記事を月毎にまとめたのが、表4である。

3.1 美智子妃記事の時系列的数量分析

美智子妃について、1958年1月1日から検索したが、初出の記事は1958年11月である。これは婚約内定の発表が11月27日に行なわれたことによると推察される。月ごとの数値をみると、全581件のうち、第一位が1959年4月で181件である。これは4月10日が結婚式であったことに関係する。第二位が先述の婚約内定発表の月で119件である。そして第三位は1960年2月である。これは2月23日に第一子を出産したことによると推察できる。

婚約から婚礼月まで、つまり1958年11月から1959年4月までの記事数は419件で全体の72.1%、その後の記事数は162件で27.9%であり、婚約から結婚までの注目度の高さが判る。

また、月別第三位の第一子出産の64件を別にすると、結婚までが72.1%、出産が11.0%、その他が16.9%という割合になる。出産は婚儀について注目度の高い出来事であった。

表4 美智子妃と雅子妃婚儀の時系列における新聞記事数

| 美智子妃関連記事数 | | | | | 雅子妃関連記事数 | | | | |
|-----------|----|-----|-----|-----|----------|-----|-----|-----|-----|
| 年 | 月 | 読売 | 朝日 | 計 | 年 | 月 | 読売 | 朝日 | 計 |
| 1958 | 11 | 78 | 419 | 119 | 1993 | 1 | 90 | 78 | 168 |
| | 12 | 5 | 20 | 25 | | 2 | 11 | 15 | 26 |
| 1959 | 1 | 22 | 16 | 38 | 3 | 7 | 8 | 15 | |
| | 2 | 15 | 9 | 24 | 4 | 35 | 23 | 58 | |
| | 3 | 27 | 5 | 32 | 5 | 21 | 22 | 43 | |
| | 4 | 103 | 78 | 181 | 6 | 114 | 126 | 240 | |
| | 5 | 16 | 3 | 19 | 7 | 14 | 11 | 25 | |
| | 6 | 8 | 2 | 10 | 8 | 3 | 6 | 9 | |
| | 7 | 10 | 1 | 11 | 9 | 3 | 3 | 6 | |
| | 8 | 4 | 1 | 5 | 10 | 6 | 2 | 8 | |
| | 9 | 4 | 1 | 5 | 11 | 4 | 4 | 8 | |
| | 10 | 4 | 4 | 8 | 12 | 10 | 8 | 18 | |
| | 11 | 4 | 0 | 4 | 1994 | 1 | 4 | 1 | 5 |
| | 12 | 6 | 0 | 6 | | 2 | 4 | 6 | 10 |
| 1960 | 1 | 12 | 1 | 13 | 3 | 1 | 5 | 6 | |
| | 2 | 58 | 6 | 64 | 4 | 1 | 1 | 2 | |
| | 3 | 7 | 0 | 7 | 5 | 1 | 2 | 3 | |
| | 4 | 9 | 1 | 10 | 6 | 3 | 5 | 8 | |
| 計 | | 392 | 189 | 581 | | | 332 | 326 | 658 |

3.2 雅子妃記事の時系列的数量分析

雅子妃について、1993年1月1日から検索した。初出の記事は1993年1月である。これは皇太子妃内定の発表が1月7日に行なわれたことによる。月ごとの数値をみると、全658件のうち、第一位が1993年6月で240件である。これは6月9日が結婚式であったことによる。第二位が皇太子妃内定発表の月で168件である。第三位は婚約中の1994年4月で58件である。この後3月も48件と第四位で、6月の式を前に、雅子妃関連の話題が盛り上がったことが判る。

婚約から婚礼月まで、つまり1993年1月から6月までの記事数は550件で全体の83.6%、その後の記事数は108件で16.4%であり、美智子妃同様、婚約から結婚までの注目度が高かったといえる。

4. 婚約、結婚、その後の記事の量と質的分析

3章で明らかにしたように、美智子妃、雅子妃のそれぞれについて、結婚、婚約がそれぞれ記事数1位、2位と注目度が高かった。本章では、時系列的に婚約、結婚、そして結婚後一年について、写真も含めた記事から、新しい「プリンセス像」について内容を検討していく。なお、本章についての記事は、写真や紙面構成も検討するため、デジタルアーカイブのみでなく、縮刷版も補助資料として用いた。

4.1.1 美智子妃婚約記事

4.1.1.1 皇太子に望まれ民間から嫁ぐ気品ある活動的な令嬢（号外記事）

皇太子明仁親王と美智子妃の婚約について1958年11月27日、号外が発行された。この号外に、皇太子と美智子妃の結婚の意味が表出している。

読売新聞では「皇太子ご婚約」「正田美智子さん（24歳） 皇室会議内定 純民間の令嬢」と見出しがつき、「皇太子妃は11月27日午前10時ひらかれた皇室会議で、日清製粉社長正田栄三郎氏長女正田美智子さん（24）に内定した」というリードが記されている。

紙面に大きくとりあげられた写真の皇太子は背広にネクタイ姿のバストアップである。また、美智子妃の写真は、濃い色のテーラードカラーのジャケットに白いシャツ姿のバストアップで微笑んでいる。二人とも濃い色のスーツ姿で、服装は似た印象である。中見出しには、「テニスのお相手 昨春聖心女子大を卒業」「皇太子のご意思を尊重」とある。

朝日新聞では「皇太子妃きまる」「正田美智子さん（日清製粉社長令嬢 皇太子さまがご懇望）」と大きな見出しに続き「宮内庁では、かねてから皇太子継宮明仁親王殿下のご婚約のお相手を選考していたが、11月27日午前10時から皇居で開かれた皇室会議（議長岸首相）で「皇太子殿下と正田美智子さんの婚約について審議した結果、これを承認した。直ちに宇佐美宮内庁長官は両殿下、皇太子さま、正田家にこのむねを報告するとともに、記者団に発表した」とある。他の見出しは「初めて民間から 愛情に支えられて」「壁を破った「人間皇太子」」「結納は1月、来年中に挙式」「学者の多い正田一族」とある。写真は美智子妃が大きく、白い胸元の開いた七分袖のドレスにパール

を被った姿で「きょう両陛下にお会いする晴れ着で」とある。皇太子は濃い色の背広にネクタイ、淡い色のポケットチーフといういで立ちで、美智子妃の写真の右上に楕円に小さくレイアウトされた写真である。

号外の一面では両新聞も、美智子妃が民間の出身で、社長令嬢であること、皇太子が強く望んだ相手であること、が共通した事項である。読売新聞には「こんどのご婚約は昭和21年元旦の天皇の人間宣言よりも、はるかに強力かつ具体的な人間宣言といえよう」とある。また、朝日新聞では「一般家庭のお嬢さんから皇太子妃へ—しかも皇太子さまご自身が交際され、選ばれたということは皇室史上画期的なことである。皇室の在り方の、ひとつの大きな転機となるご成婚といえよう」と記されている。この時代、民間から皇室に嫁ぐことの社会が受けた衝撃が伝わってくる。読売新聞号外の2枚目は写真中心で、軽井沢での皇太子、美智子妃、友人達のテニス姿の写真、エプロンをかけ自宅の縁側での日常の美智子妃、バッキンガム宮殿前で衛兵と一緒に写る美智子妃、正田邸（洋館）の写真等が掲載され、活動的で国際的でありながら、家庭的なお嬢様という印象が伝わってくる。朝日新聞二枚目の号外には4枚の写真が掲載されている。軽井沢でのテニスの後の談笑シーン、正田一家の写真、まだ十代であった美智子妃の軽井沢すべり台の上での笑顔の写真、そして、「きょうの晴れ着の着付け」と題し号外一枚目写真で着用していた白い胸元の開いたドレスの上に毛皮のショールをはおり、ヘッドドレスを着用したものである。ここからは、活動的でありながら気品ある美智子妃、真面目な正田家、そして何より皇太子と美智子妃の心が通っているような印象である。ちなみにこの朝日新聞の号外で「愛称は「ミッチ」」と紹介されている。

そして号外の紙面から、民間から妃を迎える「新しい皇室」をつくりだそうとする皇太子の強い意思もうかがうことができる。

4.1.1.2 美智子妃への注目度

婚約記事について、婚約発表の1958年11月27日は、読売新聞31件、朝日新聞17件であった。そのうち、美智子妃を主にした情報記事が16件と一番多く、マスコミや読者の興味の対象が美智子妃本人であることが判る。その次に多いのが識者などによる婚約に関する評論や談話で、9件である。次が婚約の経緯についての記事で5件。今後の婚礼に関する儀式や計画についての記事が4件。皇太子を主にした記事は3件。美智子妃の実家である正田家についての記事が3件。国際的な視野に立った記事が2件であった。この記事数から美智子妃への注目度の高さがうかがえる。

婚約発表の日に美智子妃が着用したドレスは、ウエストを細く絞り、膝下の裾にむけてスカートが広がったもので、50年代に流行したいわゆるディオールのAラインといわれるデザインである。夕刊一面に掲載された美智子妃の写真は、白いヘッドドレスで髪をまとめ、気品ある中に、初々しさ、可愛らしさがある立ち姿である。まだ一般に着物を着用する人が多かったこの時代に、流行の洋装を着用した美智子妃の姿が人々に与えた印象は鮮烈であったのではないだろうか。

読売、朝日の11月27日の記事中の美智子妃に関するキーワードは「令嬢」「おえん」「そう明」「気品」「健康」「ゆたかな内面」「名門」といったものであった。また、海外の様子を伝える記事に

は「海外でも祝福と歓迎」「若い日本の象徴」「民主化する皇室に親しみ」と、今回の婚約が好意をもって世界中に受け入れられていることが記されている。戦後の影が残るこの時代に、この婚儀が国際社会において認められることに、意味があったといえるだろう。

4.1.1.3 報道協定

本研究において新聞記事検索の結果、記事の初出が婚約発表の日であった。その理由を一つの記事から知ることができる。読売夕刊に「人権尊重の精神」という見出しで、今回の婚約について、小泉信三¹³の提案により、日本新聞協会加盟の新聞、通信、放送各社が、取材合戦から美智子妃の人権を守るために、協定を守ったということが判る。この記事では「これは報道の自由を放棄したことではなく、報道機関がその信ずるところに従ったものである。」と結ばれている。美智子妃という存在が社会的に大切にされた、ということを知ることができる。

4.1.2 美智子妃結婚記事

4.1.2.1 伝統衣装とローブデコルテ

皇太子明仁親王と美智子妃の婚儀は、1959年4月10日に行われた。読売、朝日の夕刊に、その婚儀の様子が大きく写真入りで報道されている。

読売新聞では「賢所でおごそかに結婚の儀」「皇太子誓いの告文 美智子さん「妃」となる」という見出しで、賢所から退出する皇太子、美智子妃写真が掲載されている。記事では「この幸運の日、970人の参列者の見守る中でまず黄丹袍（おうにのほう）の皇太子さま、次に十二単（じゅうにひとえ）の美智子さんがそれぞれサカズキに注がれたおミキをのみほされた」と記述されている。写真では一般人が通常見ることのない、平安時代から続く日本の伝統衣装を着用した皇太子、美智子妃の姿を見ることができる。「王朝絵巻さながら 歴史に刻む 10時12分 目にしむ古代極彩色 十二単の重さに耐え 白いカワラケで神酒「永遠のちぎり」誓う」とある。この一連の見出しから、古式豊かな儀式の様子がイメージできる。ちなみに十二単は略称で、このとき美智子妃が着用した装束の形式は五衣唐衣裳である。また皇太子の衣装は東帯である。

一方同じ夕刊の後のページでは、皇太子と美智子妃の洋装姿が掲載されている。

読売では「朝見の儀」で親子の固めを終えられた」と題し「左から天皇陛下、皇太子殿下、美智子妃殿下、皇后陛下」と説明がなされ、大きなマントルピースの前で、中央に皇太子と美智子妃が立ち、両脇に昭和天皇、皇后が座っている写真が掲載されている。午前中の賢所での儀式を終え、洋装に着替えた皇太子と美智子妃が、「朝見の儀」で、天皇・皇后に挨拶をした後の写真である。

朝日では「喜びにわくきょうの盛儀」と題し、賢所、パレードの様子とともに、宮内庁玄関での皇太子、美智子妃の洋装姿の写真が大きく掲載されている。

燕尾服に勲章を佩用した皇太子。ローブデコルテにティアラを着用し、こちらもやはり勲章を佩用した美智子妃。白い長手袋をはめた手で豊んだ扇を持っている。皇太子はりりしく、美智子妃は気品ある美しさである。

美智子妃のローブデコルテについては、1959年1月24日の朝日新聞夕刊に記事が掲載されている。「注目のプリンセス・ライン 披露宴のデコルテ 美智子さん専用の布地を使って」という見出しである。「美智子さんが勲章や綬をかけて着るすその長い正式の洋装である。これは二着つくり、一着は田中千代さんが、他の一着はフランスの一流デザイナーに依頼する予定という」と書かれている。記事では田中千代が「似合えば流行のラインもとりたい」と述べ、記事は「田中さんかフランスの一流デザイナーか、ともかく新しく創造される“日本のプリンセス・ライン”に期待がかけられている」と書かれている。つまり、この日の美智子妃のローブデコルテは、時代の新しさをとり入れたデザインであった。ウエストを細く絞り、裾に向けて大きく広がったスタイル、胸元がV字型に開いたデザインは、裾の長さは違うが婚約発表の時と同様、この時代の流行の先端をいくものであった。

婚儀の日の同じ紙面に、五衣唐衣裳とローブデコルテ。美智子妃が、伝統を継承しつつ、皇室に新風を吹き込むという存在として印象付けられたのではないだろうか。

4.1.2.2 新しい家庭・手料理

婚儀が行われた1959年4月10日と翌11日の美智子妃結婚関連の記事は、読売が10日35件、11日14件で計49件であった。朝日は10日が24件、11日が18件で計42件、読売と朝日、合計で91件であった。

記事の種類で一番多かったのは、一般人の結婚に対する反応の記事で、19件。次が皇太子・美智子妃を「夫妻」としてとり上げたもので、11件である。三番目が識者らの談話・評論で10件。4番目が国際的な記事で9件。5番目が新聞記者執筆のコラムや社説で8件。6番目が儀式関連で7件。そして儀式の際の事故に関する記事が同じく7件。8番目が、記事一般としての結婚報道で6件。9番目が、天皇・皇后関連の記事が5件。10番目に道子妃情報が4件、同数で、実家の記事が4件。12番目が皇太子関連で1件である。

婚約報道では1位であった美智子妃関連が10番目になったが、その代わり皇太子・美智子妃を「夫妻」として見た記事が増えたわけである。つまり、「妻」「妃殿下」としての美智子妃の記事が増えたといえる。

読売新聞4月10日には「晴れの日を迎えられたお二人」「新しい皇室づくり」と題した記事がある。「ときには手料理も 菊のカーテンはまだ厚いが ささやかながら“妻の座”という中見出しがつけられている。記事では、美智子妃が結婚後は側近がいるので落ち着かないだろうという記者の意見だが、それに続いて「こんな環境で、美智子さんの妻としての“座”がただ一つ用意されている。それは年内に完成する新東宮御所に設けられる小さな料理室で、広さ約9.9平方メートル(約3坪)居間に続いて作られた美智子さん専用のキッチンだ。これまでの皇后には、考えることもできないことだ」とある。

また、「育児は母乳で」という小見出しがあり、天皇家の慣習である親子別居の話を聞いて「美智子さんは大いに驚いたという。結局新御所には2つの王子室が設けられることになった」とあり、

「育児も皇太子さままでは乳母制度で、お乳は母親でなくこの乳母が与える制度だった。こんどは美智子さん自身と人工栄養で育てることになっている」と記述されている。

この当時、一般家庭であれば、主婦が料理をつくり、子供は自身で授乳するという当たり前のことが、天皇家ではなされていなかったわけだが、それを美智子妃が実践するという記事が、「家庭的」であることを印象付けたであろう。まさに、皇太子と二人で「家庭」を作っていく、ということである。

4.1.2.3 一般人の「あやかり」と幸せを願う気持ち

4月10、11日の記事で一番多かったのが、一般人の反応である。東京では沿道のパレードに人々が集まり、全国各地でも提灯行列で奉祝がなされた。4月10日朝日新聞夕刊では「おめでとう！皇太子ご夫妻 お二人にこやかに 沿道の歓呼にお応え 拍手・口笛…の群衆」という見出しの記事がある。また、「一般参賀記帳はあすの午後」と、一般参賀の記帳を11日午後1時から4時まで、皇居仮宮殿中央車寄前で受け付けるとある。

4月10日の読売新聞夕刊でも「空から町からおめでとう」という見出しで、「晴れの日を迎えて 万歳！万歳 皇居前を埋めるお祝いの群衆」の写真や、後楽園で行われた「祝奉フォークダンスフェスティバル」で踊る若者達の写真が掲載され、日本中の多くの人々が皇太子と美智子妃の婚儀を祝福したことが紙面から伝わってくる。

また、同じく朝日新聞4月11日には「あやかり組くりだす 国鉄も旅館もほくほく」とあり、「10日、皇太子さまのご結婚にあやかって全国各地とも結婚式ブーム。どこの式場も朝から夕方まで予定がぎっしり。…(中略)…おかげで国鉄が仕立てた東京発伊東行きの新婚旅行特別列車「ちよだ」は満員」とある。この記事には髪を文金高島田に結び、打掛を着た花嫁姿の女性とモーニング姿の数組のカップル達が、ビルの屋上から手を振る姿の写真が掲載され、「馬車行列に手をふる花嫁さんたち(東京・半蔵門T式場屋上で)」とある。「あやかる」行為とはまさに、皇太子夫妻に同調することであり、皇太子・美智子妃への親近感の表れでもあると考えることができる。

4.1.2.4 プリンセス誕生

読売新聞4月11日には品川区長がモーニング姿で美智子妃の除籍手続きをした、とある。4月10日婚儀当日の読売の記事には、美智子妃の「ご紋」が「清純なシラカバ」とであると報道されている。民間人から皇族の一員になったわけである。

そしてまた、賢所での平安時代の装束と、朝見の儀でのローブデコルテ、伝統と新しさを表現した儀式服姿は、美智子妃がもはや民間人ではなく、皇室の一員になった証でもあった。朝日新聞4月10日には美智子妃のお妃教育の事が書かれている。「プリンセスは決して後ろをふり返ってはいけません」「プリンセスは廊下の端を歩いてはいけません」「プリンセスの視線はいつもまっすぐに、伏目がちはプリンセスの美德ではありません」と、皇太子教育で「エチケットを担当した松平信子¹⁴さん」は「貞明皇后が“4人のヨメ”の家庭教育に熱心で。秩父宮妃殿下や三笠宮妃殿下に妃殿下と

しての心がまえはもちろん、あらゆる場合の礼儀作法を具体的に手をとって教えたことを美智子さんに話した」とある。このお妃教育からいえることは、ただ五衣唐衣裳やローブデコルテを着用するだけではなく、プリンセスにふさわしい振る舞いをすることによって、はじめて本当の「プリンセス」になるのだ、ということである。

朝日新聞4月11日朝刊には一面に、テーブルを挟んでソファーに座り、新聞を見ている皇太子と美智子妃の写真が大きく掲載されている。「馬車行列を終わって夕刊をごらんになる皇太子ご夫妻」と解説されている。皇太子夫妻が読んだであろう10日読売新聞の夕刊には先に述べたとおり「晴れの日を迎えて万歳！万歳 皇居前を埋めるお祝いの群衆」というキャプションで万歳をする老人、国旗を振る人々の群衆が写っている。それはまさに、夫妻が前日のパレードの折に目にした風景であろう。人々の歓喜の声、熱気等を思い起こす記事でもあったと推察できる。このような人々の存在がまた、美智子妃自身が「プリンセス」であることを、自らに実感させたのではないだろうか。1959年4月10日の婚儀の日、こうして美智子妃というプリンセスが誕生したことを、新聞記事から知ることができる。

4.1.3 美智子妃結婚後一年間の記事

先の表4において、結婚後一年間のうち、突出して数が多いのが1960年2月である。これは、出産による。ここでは、主に出産に関連する記事と、皇太子妃としての活動の記事について、検討する。

4.1.3.1 皇太子妃としての美智子妃の活動

結婚後1959年4月12日から15日までは「宮中祝宴」関連の記事が並ぶ。13日読売では「はなやかな宮中祝宴 雅楽の音も優雅に夫人同伴 200人参列」と祝宴の様子が伝えられている。2日目には議員ら1455人が2回に分かれ、祝宴3日目には文化勲章受章者らが招かれた。

また、4月17日には「伊勢神宮などにご結婚報告」のため出発した。「途中駅には盛んな歓迎」がなされた。18日の読売には「潔斎の一夜」の様子が記事となっている。こうした一連の記事は19日で終了している。結婚式に続き、伊勢神宮へのこうした儀式もまた、皇太子妃としての務めであった。

帰京後は、一般の行事への出席が続いた。5月3日に学習院の園遊会、24日に警察音楽隊演奏会、6月5日にアジア野球観戦など。そして7月1日には「皇太子ご夫妻新事業スタート」として「全国の施設ご視察 まず母子愛育会へ」と、本格的な皇太子夫妻としての活動の取り組みが紹介されている。

4.1.3.2 出産関連記事

ところが、7月15日読売、朝日ともに「おめでた」の記事が掲載された。「美智子妃おめでたか日光御旅行とりやめ」(読売)、「美智子妃“おめでた”の模様 日光旅行などおやめ」と、確定ではない表現であるが、ほぼ同じ調子である。ここから美智子妃関連の新聞記事は、ほぼ出産一色とな

っていく。

8月5日（読売）「美智子妃の主任産科医決まる 小林東大教授」、18日（朝日）「美智子妃専任医に小林教授」と妊娠関連の記事が掲載された。9月15日には「ご出産は3月はじめ 乳母はおかない」（読売）、「美智子妃おめでたは3月はじめ」（朝日）と大体の予定日が報道された。10月7日には「皇后さまから帯 美智子妃の内着帯式」（朝日）と帯の日の儀式が伝えられている。

そして1960年2月23日に「美智子妃 男のお子をご安産 午後4時15分」という号外が朝日より出された。また読売は夕刊で「美智子妃男子ご安産」と報じている。24日には「国民あげてお祝い」（読売）と、一般人の反応の記事が掲載されている。また、「両陛下お見舞い 美智子妃ご安産」（読売）と天皇・皇后についても記事になっている。24日には「英王女から祝電」が紹介されている。29日には「命名の儀」と「おしるしはアズサ」と報じられた。

結婚一年後の1960年4月10日には「ご結婚から1年 皇太子さまよきパパぶり」（読売）とある。親王誕生は、まさに皇太子妃としての期待に応えた事象であった。

4.1.3.3 園遊会などでの活動

しかしながらまた、4月12日には「美智子妃も和服姿で 皇居で園遊会」（朝日）、4月20日にはネパール国王一行の宮中晩餐会にも出席（読売）し、皇太子妃としての公的な活動にも取り組んでいる様子が報道されている。

4.1.4 昭和のプリンセス像

美智子妃は、民間から皇室に嫁いだ妃として、一般の人々の耳目を集めた。婚約時には、活動的でありながら上品でそう明な令嬢として紹介され、50年代のトップファッションに身を包んだドレス姿は、人々を魅了した。

結婚の儀では平安時代の装束とローブデコルテ姿が紹介され、それは皇室の伝統と新しさを象徴する姿でもあった。しかし、美智子妃自体が民間出身という背景があったからこそ、その革新性が、多くの人々に実感として伝わったことであろう。そして衣装だけではなく立ち居振る舞いというプリンセスマナーを身につけたからこそ、本物のプリンセスとしてのアウラを身につけたのではないだろうか。また、一般の人々に祝福され、まなざされること、つまり一般の人々から皇太子妃として意識されることによって、美智子妃自身のプリンセスとなった実感も沸いたと推察できる。そしてまた、美智子妃の結婚一年以内の皇太子妃としての大きな出来事は、出産であった。出産後、乳母はおかず美智子妃自身で授乳した。結婚に際しても「手料理」を作るために台所を置いた。美智子妃のこうした一連の行為は、皇室にそれまでなかった「家庭」を作ったということに他ならない。

4.2.1 雅子妃婚約記事

4.2.1.1 一般人が祝う婚約内定

新聞各紙において、皇太子徳仁親王と雅子妃の婚約内定は1993年1月7日に行われた。この日の

婚約関連記事は、読売、朝日合わせて52件であった。そのうち一番多かったのは、一般の人々の反応や社会的反響の記事で11件。次が、社説やコラムの5件。次に雅子妃関連、結婚の経緯、談話、国際的視野の記事がそれぞれ4件。結婚報道、経済記事が3件。儀式や計画についてが2件。そして皇太子中心の記事が1件であった。美智子妃と違うのは、一般の人々の反応や社会的反響について一番多く、この平成という時代の流れが、雅子妃個人に対する興味本位の記事というより、社会一般の意見を重んじる傾向になったと推察できる。

読売では「ロイヤルカップル誕生 列島に祝福走る」とあり九州、山口版では「早速客らに樽酒」がふるまわれ、「皇太子妃に小和田雅子さん内定 ゆかりの人々おめでとう」と東海地方版で報道されている。雅子妃の内定は、さまざまな地方の人々にとっても喜びを共有する出来事であった。

4.2.1.2 外交官というキャリア

雅子妃自身については「非のうちどころのない」「群抜く知性 勤勉さ」とあり、「プリンセス小和田雅子さん本人が語った「私」によると「茶道習い 和食が好み」である。朝日新聞の記事では「将来の大使」転身し、「皇室外交に華」と題されている。社会的反響としても、「キャリア女性から声援」を送られている。また「笑顔楽しみ、末長く」という記事もある。これらから、雅子妃に対し、「29歳外交官」としてのキャリアを生かし、笑顔で皇室外交に華を添えてほしいという人々の期待を読み取ることができる。29歳という年齢が見出しにつけられたことも大きな意味を持つ。一般に25歳前後が女性の結婚適齢期といわれてきたが、平成という時代において、いわば「アラサー」女性が皇室の花嫁になることは、ひと世代前の人々にとっては意外であったと推察できる。雅子妃の婚約報道は、この時代の、仕事と結婚の狭間に揺れる働く女性達にとって、ほっとするものだったかもしれない。

読売新聞には、ハンドジェスチャーを交えてにこやかに微笑む雅子妃の写真と、スーツにネクタイ姿の皇太子の写真が並べられている。朝日新聞では皇太子は縞柄シャツに濃い色のネクタイのスーツ。雅子妃はショートカットのヘアスタイルで、オープンシャツの胸元からネックレスが見えている。大ぶりのイヤリングが良く似合って活動的なイメージである。真剣に何かを話しているような、笑っていない写真が、キャリアウーマンという印象である。

美智子妃の婚約時には、時代の流行のAラインのワンピース姿が上品で美しい印象であったが、雅子妃の婚約時の写真は、まさにキャリアウーマンという感じのカッコいい美しさ、という印象である。

ワシントンポストやロイター通信でも、雅子妃内定のニュースが報道された。

4.2.1.3 恋を実らせた皇太子

婚約の経緯については、「同じ価値観大切に 難航も理想の選択」(読売)、「恋を実らせた皇太子さま 一途な想い」(読売)、「熱意が心動かす」「決断 12月12日 プロポーズに揺れた心」「回り道の末、実を結ぶ 難航続いた選考」(朝日)という見出しが並ぶ。これらから、皇太子の熱意が、雅

子妃の心を動かし、婚約に至ったという経緯が明らかである。

そして12月12日のプロポーズを受け1月7日内定発表という速さに、それまで難航していた物事が進んだ時の勢い、つまり婚約内定について本人はもとより一般人も喜び、祝福した、ということがうかがえる。

そして、皇太子の婚約相手としての雅子妃新聞の初出がこの日であるのは、美智子妃婚約の折を前例として日本新聞報道協会の協定が守られたという事であろう。

4.2.2 雅子妃結婚記事

4.2.2.1 キャリアウーマンファッションから皇室ファッションへ

1993年6月9日に、皇太子と雅子妃の婚儀が行われた。9日には読売新聞で「愛の旅立ちに幸あれ」、朝日新聞で「ご結婚へ充実の日々 身近な皇室をお二人の手で」と題し、それぞれ結婚までの二人の写真が大きく取り上げられている。

読売新聞に掲載された昔の雅子妃は、縦縞シャツに白いジャケット、ショートカットで颯爽と歩く姿がカッコ良いが、「デートルック」と題された婚約時代の写真は、肩までのセミロングのボブカットに、襟もとにスカーフというコンサバ調のコート姿で、雰囲気を変化している。そして皇太子と共に撮影された近年のツーピース姿は、表情もアルカイクスマイルで、ポーズも前で手を結んだものである。いかにも皇室の一員といった雰囲気でも上品だが、以前のカッコ良さは感じられない。

朝日新聞でも、「皇太后さまへ婚約のあいさつに4月28日」の写真は、膝丈のシルクのワンピースの胸元にブローチ、羽根のついたヘッドドレス、白い手袋にセカンドバッグを持つ姿は、すっかり皇室の一員のようなものである。

それでも、人々の雅子妃に対する思いは平成の時代を反映した新しさだった。それを表す談話が掲載されている。メディアプロデューサーの残間里江子は「生き方も、物のほびり方も「知性」がキーワードになっているこの時代、ハーバード大、東大、外務省と知の最前線をくぐり抜けてきた雅子さんは、平成の世の人心の欲求と直結した存在」と述べている。そして談話は「女はかわいけりゃいい」から「やはり賢くないとダメ」に塗り替えた功績は大きい」と締めくくられている。

キャリアウーマンファッションから、婚約時代を経て皇室ファッションへと変化はあったが、雅子妃の「知性」にはもちろん変わりはないことを、一般の人々も知ってはいたが、外見のイメージが変わったのは確かなことである。

4.2.2.2 伝統衣装とローブデコルテ

4月9日読売、朝日の夕刊には、賢所を進む皇太子と雅子妃の、束帯と女房装束姿の写真が掲載されている。そこでの雅子妃は、緊張した面持ちではあるが、きりりと口元を結び、まっすぐに前を見て歩いている。また、翌10日の朝刊には、洋装のパレードの写真が掲載されている。美智子妃から受け継いだ(9日朝日)豪華なダイヤモンドのティアラをつけ、顔を取り巻くディナージャケットの襟元が、雅子妃の笑顔の華やかさを一層ましている。「こぼれる笑み ご結婚パレード」(読

売)という題のとおり、そこには自然な笑顔がある。外交官という仕事をこなしてきた雅子妃ならではの堂々とした笑みである。読売10日には、「朝見の儀」を終え、天皇・皇后とともに記念撮影した写真も掲載されている。シンプルなローブデコルテに宝冠章の綬がアクセントのように綺麗に映え、豪華なティアラとネックレスに負けない堂々とした美しさを湛えた立姿である。

美智子妃の時と同様、皇室の婚儀では日本的な伝統と西洋的なものの共存が、ファッションによって提示されている。

4.2.2.3 一般の人々が提示した祝福と問題意識

6月9、10日の二日間の、読売と朝日における雅子妃婚儀関連の記事は、108件であった。そのうち一番多かったのは、婚約時と同様、一般の人々および社会的反響の記事で、36件であった。9日読売では「華麗に平成絵巻 見守る祝福列島」、「平成皇室新たな門出 列島でおめでとうご結婚ホリデー楽しむ」と、祝日になったこの日、ともに祝う人々の気持ちが記事となっている。しかしまた、「反対の集会、各地で 皇太子さま雅子さま「結婚の儀」(朝日)と反対の意を唱える人々や、「天皇制」考える集いも」と、この婚儀を契機に問題提起がなされることもあった。また、「商店街はふだんどおり 「結婚の儀」の関西各地の表情」(朝日)と、普段通りの日を送る人の様子も伝えられている。昭和には記事にされなかった反対や疑問を投げかける人々の動きも、記事になっているところが平成ならではの、といえるだろう。

そして美智子妃の時にもあったが「花火や婚姻ラッシュ」(朝日)あやかり組もあった。「パレードに女性ら「きれいね」」(朝日)と、素直な感想も述べられている。

4.2.2.4 主体的なプリンセス

6月10日読売新聞には「皇太子さま雅子さまご成婚「開かれた皇室」への期待」という解説記事が掲載されている。また、一般人への取材記事では次のように述べられている。「雅子さまに新しい世代の魅力を感じるとすれば、それは働く女性の気概や気骨。皇室に入られても、日本の女性の顔として常に向上心を持たれ、主体的に意見を述べ、正しく開かれた皇室の形を作ってほしい」(読売)というものである。自分の意見をもつ主体的なプリンセスによって、皇室の形が新たなものとして変わっていくことを、人々が期待した代表的な意見である。

4.2.3 雅子妃結婚後一年間の記事

4.2.3.1 さっそうプリンセス・マサコ 宮中サミット

雅子妃も美智子妃の時と同様、婚儀の後、宮中饗宴が行われ、のち伊勢神宮に皇太子とともに赴いた。6月26日に「静ひつ神域 結婚ご報告 皇太子ご夫妻 伊勢神宮に参拝」(読売)、「皇太子ご夫妻大和路へ 神武天皇山陵へ結婚報告」と儀式が続いた。そして7月9日には「さっそうプリンセス・マサコ “宮中サミット” 笑顔の主演」(読売)と雅子妃らしい活躍ぶりが報道されている。また、10月19日の読売では「皇太子さまが来年1月に中東ご訪問へ 雅子さまご同行で調整」(読

売)とあり、外交官としての雅子妃のキャリアが宮中外交で発揮される様子が伝えられている。

4.2.3.2 より身近なプリンセス

結婚後の6月12日朝日には「雅子様に願う開かれた皇室」という声(投書)が寄せられている。そこには「妃殿下は庶民と近い感覚をお持ちになっていると思う」と記され「伝統ばかりの良さでもなく、それにプラスする独自の方向がこれからはどんな分野でも求められてくるようになる。…(中略)…新しい時代を開くお二人に期待したい。」と結ばれている。翌1994年4月18日読売には「共感カップルは皇太子・雅子妃」と講談社アンケートの結果が出ている。5月15日には「理想の家庭教師は雅子さま」(読売)と民間アンケート調査の結果である。美智子妃はただ憧れの対象のような存在であったが、雅子妃はより庶民的な身近な存在であり、キャリアウーマンという実践的な経歴から、新しい時代を開く存在としての期待を、一般の人々が寄せていたことが判る。

4.2.4 平成のプリンセス像

雅子妃は外交官というキャリアウーマンであり、人々は雅子妃が様々な場面で活躍することを期待した。宮中サミットでは通訳なしで歓談し、その活躍ぶりは新聞でも報道された。平成のプリンセスは、昭和のプリンセスより、より能動的な姿勢を求められたといえるだろう。1986年に男女雇用機会均等法が施行されて8年後のアラサーの雅子妃の結婚は、結婚後も活躍の場を見出したい働く女性達にとって、希望の光だったのかもしれない。

5. まとめ：昭和のプリンセスと平成のプリンセス

本稿では、美智子妃と雅子妃という昭和と平成時代の皇太子妃の婚約から結婚後1年間の新聞記事を通して、その時代の具体的なプリンセス像を検証した。

二人に共通しているのは、それぞれ皇太子に望まれ、愛情をもって結婚したことであり、ややもすると菊のカーテンで覆われ、形式的に考えられがちな天皇家の婚儀に、一般の人々が希求する「愛」というイメージを与えたことである。それはもちろん、皇太子の力にもよる。そうした愛情を背景に二人はそれぞれ、新しい時代のプリンセス像を人々に提示した。女子大を卒業して天皇家に「民間」から嫁いだ美智子妃は、それまでの皇室の慣習を変えて、自分の手で料理をし、子育てをし、いわば「家庭」を作った。一方、雅子妃は外交官を経て、天皇家に嫁いだ。通訳なしで「皇室外交」も果たし、結婚当初、いわばキャリアウーマンとしてのイメージを提示した。

これらのプリンセス像が創出された一番の背景には、当時の人々の存在が大きい。つまりプリンセスをまなざす「庶民」が存在してこそ、「プリンセス」が明確になるのである。

美智子妃と雅子妃。昭和と平成、それぞれに時代の求めたプリンセス像に応えた姿だった、ともいえるだろう。

【参考文献】

- 青木淳子(2010年)「昭和時代の結婚」『歴史読本』2010年10月号 新人物往来社
寺田文一他編集(2008年)『別冊週刊女性 雅子さまと愛子さま』主婦と生活社
松下圭一(1959年)「大衆天皇制」『中央公論』昭和34年4月号 中央公論社
松下圭一(1959年)「続大衆天皇制」『中央公論』昭和34年8月号 中央公論社
森暢平(2013年)「ミッチー・ブームその後」『戦後史のなかの象徴天皇制』吉田書店
吉見俊哉(2003年)『カルチュラル・ターン文化の政治学へ』人文書院
別冊宝島編集部(2017年)『美智子さま 品のある装い58年の軌跡』宝島社

-
- ¹ 別冊宝島編集部(2017年)『美智子さま 品のある装い58年の軌跡』宝島社 pp52-53
² 寺田文一他編集(2008年)『別冊週刊女性 雅子さまと愛子さま』主婦と生活社 p52
³ 松下圭一(1959年)『中央公論』昭和34年4月号 中央公論社 p45
⁴ 松下圭一(1959年)『中央公論』昭和34年8月号 p114
⁵ 吉見俊哉(2003年)『カルチュラル・ターン文化の政治学へ』人文書院 p247
⁶ 吉見(2003年)前掲書 p255
⁷ 青木淳子(2010年)「昭和時代の結婚」『歴史読本』2010年10月号 新人物往来社 pp131
⁸ 森暢平(2013年)「ミッチー・ブームその後」河西秀哉編『戦後史のなかの象徴天皇制』吉田書店 p204
⁹ 森(2013年)前掲書 p210
¹⁰ 新聞のデータベースは本研究で使用した読売新聞社「ヨミダス歴史館」(1874年創刊～1989年、他)、朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」(1879年大阪朝日新聞創刊～現在、他)の他に、毎日新聞社「毎策」がある。この中で、全新聞イメージが収録され、キーワード検索数が多数であった「ヨミダス歴史館」と「聞蔵Ⅱビジュアル」を資料とした。但し、雅子妃の年代はデータが文章のみの例もあり、その場合、写真記事に関しては縮刷版を利用した。調査にあたってご示唆、ご教示くださった東京大学情報学環付属社会情報研究資料センター近藤瑞穂氏に、深謝申し上げます。
¹¹ 例えば1993年1月12日朝日新聞「斎王の恋人の姿を史料や講演で再現 三重の斎宮博物館」では文中の「醍醐天皇の皇女・雅子内親王」という言葉がヒットしている。この他、コンクールやスポーツ大会への出場者、また本の著者等に「雅子」という名がある場合にもヒットする。このような記事は無関係と判断した。
¹² この他にキーワードとしては皇太子妃、ミッチー、等の言葉も考えられるが、本稿では、それぞれの時代の皇太子妃である個人名としての「美智子」妃、「雅子」妃として捉えられた新聞記事を対象とした。
¹³ 小泉信三(1888-1966) 経済学者。皇太子明仁親王の東宮御教育常時参与を務めた。
¹⁴ 松平信子(1886-1969) 外交官松平恒夫の夫人。侯爵鍋島直大の4女。姉は梨本宮妃伊都子。娘は秩父宮妃勢津子。

(2017年9月29日受理)